

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	尾崎行雄氏に同情す : 論説
Author(s)	鳥井, 匡
Citation	龍南會雜誌, 151: 1-14
Issue date	1913-06-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6242
Right	

尾崎行雄氏に同情す

鳥井匡

一、大和魂の行衛

二、人爵と天爵

三、松田正久氏と尾崎行雄氏

天下の豪傑大隈伯折々は法螺を吹き損ひ江戸つ子の氣焔時には當てにすべからざれども前者は明治の寶物にて後者は大和民族の粹であり早稻田の高閣に大法螺小法螺の高く鳴り渡るは駿河の國に富士の嶺の聳ゆる如く大和島根の壯觀であり黄金かも權勢よりも男子一片の意氣を尊んで議會停會の當日白薔薇議員の歸るを擁して滿腔の謝意を注げる江戸つ子の勇み氣質に芬香汲むに堪ふるものゝ存するは如何なる形式屋も畧知らむ大坂人士を贅六とびなしてけちを附るは金が憎いに非ず商賣根性がさもしいに非ず淀川の出口に繋ぐ大船小船の並べるは見事なれど烟突の烟が悪魔の吐いた息の様に空にみなぎるは頗る景氣よけれども肝心の氣象の中によからぬ臭の籠れるが大和民族の鼻に附く所なり。梅花の香を真に「い」と感ずるは恐らく日本人の鼻の特權で大阪人士を贅六と罵るは又恐らく日本人の氣象の特權である。アメリカ根性支那根性は大阪贅六の銅貨臭きを感じる資格も無く余裕も無い人間金ほど尊きは無しと自覺するはコンマ以下の遊蕩屋善人若しくは我利々々亡者の職分にてそんな者は百圓札を額にして床の間に飾つてでも置くが似合ふ圖也、金の尊き位

は小學校に行く前よりよくよく肝にしみ込ませ廿歳三十歳となり大きな身軀をして今更に黄金權勢物質崇拜に心火を燃すは挨拶の仕様も無し、吾らは自働車の欲しいが故にセンチュリー辭典の欲しいが故に若しくはシルクハットをかぶらんと欲するが故に黄金を要し黄金の故に黄金を得んと欲する存念は毛頭微塵もなし。古河市兵衛豪くとも彼の眼中存するものは黄金以外に何物がある、若し彼の一身化して黄色燦たる金塊ともならば彼は目出度き往生此の上も無しと喜ばう、すれば物質は人よりも尊しと云ふ理屈も立て兼ねまい、吾らは物質を好むこと人並より下ること無きも濟生會に百万圓寄附せる程の長者故大倉喜八郎を崇拜せよと云はるれば大いに悄然たらざるを得ない、大倉喜八郎崇拜を勧誘せられて直に悄然たることを得るは犬養木堂を好めと勧められて應と動く等しく吾ら青年の大なる誇りであり全時に大和民族の民性に咲く香しき花である、大阪贅六に此の花は咲かず江戸つ子は絆纏着て天秤荷うても時としてこの花の匂を放つ、その放つや凜たる香氣遠く物質の人造品をはね越して黄金利権の異臭に打ち勝つ、小に放つても仁丹程の清涼劑となり大に放たば千古萬秋磅礴として天地に漲る、吾らは人間である人間なるが故に胸を叩かば或は邪念百出妄想群り出で觀念を形づくるものは或は利祿權勢惡どき情慾の固りなるかも知れざれど右より打ちしその胸を左より叩き返せば顯るゝものは正義道德等雄渾魄大のものたるべき要が有る。物質の用は精神に用ひらるゝことであり精神の用は物質を用ふべきであり物質斷じて精神を支配すべからざるは人間の根本元則である、物質に赴かむと欲せば赴くこと毫も不可なきは恰も阿蘇山の頂上に獨居するの不便なると全しく解り切つたる道理なれど眼を細め靈を制へ精神をして敢て物質の脚下に跪かしむるは人間本來の姿を失ひ人間の特權を蔑にする無慘の行である。世は如何に變化せむも物質文明如何に進まむも人は斯くあるべきものなりと云

ふ法則は決して變るべきもので無く物質の力盛なるが故に物質に化すと云はゞ文明の意義丁度逆となり文明とは人が物質に仕ふるものなりとでも定義すべき事となる。若しかゝる定義がゴ尤もとなれば人類滅亡の期では機械道具と全一視せられ無論精神とか靈魂とかその他の抽象的無形物は姿も見えず消滅し終らむ。無徳無智無能の癖に徒に不徹底の倫理道德説を吾を得顔に陳ね黄金物質を平然として冷遇し得るかの如くに振舞ふ所謂君子よりも公々然と非君子を標榜して知慧と勇氣で物質界を濶歩する所謂俗界の俗物の方がましなる事は無論明白の事なり。元來物質とは有難いものにて有難く無いと云ふ奴は間違なり憧憬の果て物質の奴隷となり物質より操縦され壓制され生命の汁を吸はるゝやうになりては慘憺たるが物質を慕うて然かも力足らざるが故に恬憺高尚を装うて物質を足蹴に掛けたる眞似を爲し心ならずも嚴かに超越を説き哲學を述ぶる輩に至つては慘憺たること一層甚しく著にも棒にもかゝらぬやぐざにて宜しく人間社會を退きその低能愚見を以て世に毒を流さぬやうにするがよいのである。凡て問題はコンマ以上の者の間に丈け入用であつてコンマ以下の者は興る權利無く盲從する權利丈けがある。然るにその權利の範圍を乱りて愚論を吐露して低能の不平等を補はむとする者は價値上物質以下にて物質の意氣を示すの要も無く單に沈黙を強ふるのみが必要である。故に問題は常に優等者の間にのみ湧くべきもので精神物質を支配せよとは人に能力の十分なるを條件として後の勸告である。汝馬鹿ならば退けである。我らは我らを以てコンマ以上として敢て人間を論り物質を考へる、我らは物質以上なりと自信して銅臭に觀念を亂す勿れ利益に茫然たる勿れと云ふ、江戸つ子の放つ香氣は先づ腕に強敵に及向ふ力あり權勢利祿を物ともせずして然る後發し大隈重信の法螺の權威は先づ彼に經世濟民の力あり宰相大官物ともせずして而る後存す。共に一種の魂がある。この魂は物質を超越せる精

神より出来る。超越と云ふ語に語弊あらば眞に物質を支配し毫も物質のために禍せられざる自由の精神より發する、大阪賢六は黄金の前に跪いて居り天下の或政黨は政權の前に合掌して我を忘れて居る故彼にも此にも不快なる臭が有る、心して鼻神經を動かせば此の種の不快の臭は到る所に満ちて日本帝國の大部を覆うて居る。昔は武士あつて香氣を發せるものゝ今の兵士は社會的には殆んど交渉無く紳士はジェントルメンの譯語でも英國に於けるジェントルメンの十分の一の有難味無く折襟で車に乗れば何時でもその資格を備へ得るとは余りに輕薄の至りだ。日本に於て紳士とはその語に附隨してハイカラを意味し藝妓を意味し金使ひの荒きを意味し清香をも發しようが惡臭をも吐く者と豫想さる。國民の華は青年なりと云ふ。青年の華は無論學生なるべきであるに學生の頭を支配するものは教科書とノートとで如何にして單語を覺はんか歴史の年號を暗記せんかが主なる學生の願望である。學校の修身の講堂では往々益するよりも失ふことがある何となれば眠くなるからである、修身の時間に外の學問でもやれば修身の話を聞くよりも有益であるからである中略。斯くある以上青年學生が國民の花たるを望むには余程讓歩せる條件を以てせねばならぬ。先づ學生は余り惡事を爲さず將來官吏たり教師たり月給取たる下地を作りつゝある者とより以上に學生を讚美するには多少倭人にならざれば出來兼ねる挨拶である、花は根幹枝葉と切つても切れぬ關係があり根幹枝葉の粹が凝つて花となれるもので花は草木の絶對の誇りであるに學生は社會と交渉する点が少なくなつた互ひに眺め合ふばかり國に事ある際學生何の役に立つ事無き際如何なる光輝を發する、思うて茲に到れば學生と云ふ花は余程いぢけた澤氣の無い花で何かの肥料を與へざれば絢爛たる趣を缺ぐこと甚しき者である、吾は學生なりと呼號する前に先づ心を潜めて學生の特徴を數へよ前二ヶ條の惡事する事の少きと月給取りとなる下地作りの外彼ら

は坊チャンである。經驗皆無、修養皆無、從つて社會の精神を知り、能はぬ優等生は、書物の中に首突き込むことの巧みなる以外に能事なく、適々經驗あり、修養ある男は、妙な所に修養し、經驗し、正面より堂々と社會の眞精神に觸れたので無い。學生の志望は、金が入らずして勳章を下げる事の早き兵學校、士官學校に多く、高等學校に入るものは、財産の貯め易き三部を先づ狙ふ、大倉喜八郎は黄金で勳二等を買ひ、山縣桂の兩元老は兎角の風評があつても大勳位公爵である。世は金銀ダイヤモンドと成らむとする者よりも銅鉄となりたがるものが多い、銅鉄大いに當分の時勢に役立つものであらうとも、金銀ダイヤの貴きを忘るれば、みじめである、松柏は建築の材とは成らうとも、樹を考ふるに當つて梅花、櫻花の清高を觀念の外に置くものは、わが大和島根をムザムザと猶太化せんとするものである。物質の浪滔々として精神の礎を搖がし、大隈伯の法螺漸く濁りを交へ、江戸つ子の氣焔動もすれば香氣を失はむとす。前者に魂あり、後者に魂あれども、魂の根抵何となく覺束なげとなる、物質の羸絆十重二十重に人の心を困めて、大和魂の行衛や如何。

二

伯夷、叔齊を大正二年度に持ち出す骨董屋も有るまじけれど、有れば余程どうかして居る男であるべき筈だ、論語孟子は徹の生んで居る点に價值があり、佛經、バイブルは人間の物數奇き加減を研究する材料とは成らうとも、講堂で講義して謹聽せむには、余りに馬鹿らしく眼を瞑つて二千年前、三千年前に飛び歸つて、より後に非ずんば、逆も正氣で傾聽すべからざるは、興を今日に使ふべからず、チヨンマゲ符を今日に着る可らざるを全理だ、現代には自ら現代の哲學が有り、現代に適用すべき佛經、バイブル、論語、孟子を知らむとせば、賢明なる頭腦と勇敢なる

膽力具へて躬自ら現代の波濤の中に突入して眞實なる現代相當の哲學を發明すべきである發明力の鈍い男は或は馬鹿な發明をなして自ら苦しみ世を憤りて損を招げど自業自得にて致し方もなし、自ら發明する勇氣無き男は古本の糟をなめて物足らぬ顔をし去年も今年も異つた所なしと考ふる男である、今年が去年と異ふ故世の中がむつかしきなり今年と二千年前三千年前は全じからざること甚しきが故に佛經バイブルは今日に適用すべがらす今日の耶蘇教徒に臭い香あり佛教徒の顔に泡でも喰つた様な物足らぬ色の有る所以である、顔回若し眞に賢明で現代に生れたりとせば決して論語の中に有る如き悠長は退職官吏の益栽いちりの如き眞似は仕なかつたであらう、日蓮豪しと雖單に怒號せる丈けで所謂その法華經なるものは國家民衆を利せる点に於て後藤新平の台灣經營鐵道發展に若かざるものである。昔時にローマ法王が豪しと見わしは人間が馬鹿で有つたからである、本願寺の前法主は女を愛し金を愛し地獄極樂の事情に通ぜざること俗人と一般であつた、現代は精神家を愛すること桑の葉の蚕に於ける如くなれども自稱精神家を容るゝに於て甚だ吝かなるものである、吾人は岩崎彌之助を尊ぶと共に三宅雪嶺を尊ぶは前者が尊ぶべき物質家で有り後者が又尊ぶべき精神家で有る故なりと雖吾らが又戈を取つて平沼專藏を攻め島田三郎を責めんと欲する所以は前者が白晝角を出すを厭はざる餓鬼であると等しく、後者が顔の先で心内の慾火を誤魔化さんとする偽物なるが爲めである。田舎の寺院に衆俗老幼の渴仰隨喜するは僧侶の説教佛像の光景鐘聲の哀音に一種の價ありて粟を食ひ漬物を噛る以外の満足の中の中に存じて捨つるに忍びざる故なれども若し住職の濁聲徒に聽衆の耳にかまびすしく佛の金泊はげ去つて人の耳目に魔力無きに到れば賽錢を捨て時間を割いてつまらぬ眞似をせんは畑の草をむしり鋤でも煩張る方遙に得策である、吾れ光輝あり權威ある精神を求めて止まざれど精神に若し力

なく價なく好い加減に繪具で染めたつかませ物なれば自分は寧ろ卑しと雖物質の甘きに附く。第三流第四流の所謂精神家(牧師僧侶)の催眠説教よりも煎餅を賞し新聞の一面でも見る方實際的で余程人生に當りはまる「當時物質の羈絆十重二十重に人の心を困しめて大和魂の行衛曖昧なり」とは中流以下の精神家多すぎて困ると云ふ謂である。耶蘇教佛敎神道乃至學校に無數の精神家續々として蟬り居れど彼らの多くは誤り考へて金を欲し位を欲し俗譽を欲し而して欲せざる事甚しきが如く装うて不徹底の道德倫理を説くが故に鼻に附て堪らず。故に精神が厭になる。故に現代が物質的になる。

神社の壯觀は若むし大木暗きはぎになつて始めて出來上れども日本の社會は今建築を了り道具を並べたまゝにしてつや無く落着きが無い、吾らは早く日本につやの附き落着きの生せむ事を望む。然に下手につや附け落附きを附けむとする者の有る故に吾ら筆を鼓し額に筋を立て、之を怒むと欲す、彼らも亦物質の跋扈を憤りて曰く人爵貴ぶに足らむや浮雲の如く空しく塵埃の如く卑し吾に尊ぶべき天爵ありわが眼は天を見つめわが心は神と通ふと、若し方便としてかゝる説を唱へば或は恕すべし若し眞面目より云ふとせば之れ斷じて聞くべからず、若し卑怯にして才藝大ならざるものゝ慰として云はゞ怒るに足らざれども若し第一流の名士より或は政府の當局者より出でたりとせば之れ國民を侮り且つ誤るものである、人は地上の生物にして天とは一切無關係のもので死人の中耶蘇敎信者のみが厄介になる所である。吾らは生れてより死するまでそれのみならず枯骨の後までも地の厄介になり生ける間は地上に勳功をたて死せる後は地中に肥料とならんとする、わが生ける中我れに賞すべき所あらば我れに人爵を興へよ、人爵興ふるに足らざれば何にも興ふるに及ばず吾が來れるは地上に勳功を立てんとて來れるなり。われは人道を云ひ地道を考ふ天理天道とは吾らの知る所に

非ず、爾若し地を愛せば天を説かずして地を説け爾の力量才藝若し豊ならずして地上の生活余りに荒涼無愜の感あらば爾は誤つて地上に出でたるなり宜しく頭を垂れ胸を抑へ悲泣の哀聲に世の情を乞はんとする勿れ強者の世界とは解り切つた事實であり友の死体を踏み越へ踏み越へ人生の戦場を進むとは詩人を待たずとも明白の道理。我ら母体を離れて地上に来る時すでに賢き心を抱いて人と生る、何の酔狂何の迷ひに地上を離れ人を疎んじ到らぬ所に空想を飛ばせ見ねもせず解りもせない天を論じ神を論じ乃至佛を論ずるか、千九百余年前ユダヤに生れし一私生兒何の奇才か不思議の論を並べしより馬鹿も利巧も智慧あるも智慧無きも神様今にも來りまして智慧あり直な人々には無上の土産を御持參になり馬鹿で惡る事好きの者其には水責火責の御呵責有りさうに饒舌り立つれど肝心の神様の宮殿が差當り何處やら解りかねて吾らかほどの善人にさへ皆目御姿が見えず。本妙寺の御堂に行けば香の烟り信者の法聲虚空に充ち満ち金光燦たる釋迦様阿彌陀様今にも御降下あり慈悲の御聲を發し給ひさうなれど容子だけで一向事實となる氣遣なく寺の途中に樹の根に座し必死となりて快癒を祈る癩病患者は遂に天にまします佛様よりは救はれずと見ね癩病院で人の藥でよくなつて行く。それが當り前だ。なる程天には佛敎耶蘇敎回敎その他の敎の神様佛様達すらりと鎮座ましますかもしれざれど夫れは天の事にしてこの地上より考へて方角も知れず尋ねて行くに便りも無い天の事。然るに吾らは地上のもの焦ればとて煩へばとて死後は知らず生前は知らず生ける間は足一步も地上を離れることは出来ぬ。我らは徹頭徹尾地人であり斷じて天人でない。人の領分は地上であり天に干涉するは或は馬鹿であり或は墮落である。

地には自ら地の理想がある。地上の理想をとらへ眞の地の生活をなすものに眞の地人の意義がある。故に妄

りに天に請願し天を云々するものは地人の意義を忘却する点に於て馬鹿であり地の生活を正面に見ざる点に於て墮落である。道徳は方便であり如何とも定めらるゝ吾らの眞の生活は哲學に根據を於ける道徳で無ければ或は僞である場合がある。基督は地人の解釋を誤まれる点に於て人類に罪があり、釋迦も全罪にしてその末派は出鱈目を云へる点に於て更に罪深い。

「オー神」と云ひ「オー佛」と云ふ、そんなものが何處にあるか。あるらしいと思ふ事があればとて「ある」と云ふ斷定の理由にはならない。如何に冗んやあるまい」と氣遣ひ乍ら感情を偽り理性を偽り教會に媚び寺院に媚び牧師に媚び僧侶に媚び無理遣に「ある」と決めつけてしまふに到つては沙汰の限りである。無論神佛はあるかもしれないが今の人間の位置では「あるかもしれない」と云ふより以上に深入りするは大に潜越の至りだ。人の理性の不完全なるは明瞭の事實にてその論理の透徹せざるも當然であるが若し「理性頼むに足らむや人の靈性の尊きあり直に神と通じ佛と通す」と云ふものあらば吾らは「爾速かに感情の熾烈なる禽獸に走れ」と返答するより外は無い。かくて大多數の宗教家は吾れ自覺せり悟達せり向上せりと思へる間に豈計らむや品のよい墮落を遂げつゝある。墮落と云ふが不隱ならば馬鹿を見つゝある彼らは或は幸福かも知れないがそれは眞鍮を黄金と誤つて恐悅して磨ると全理にて自分だけにしか通用せない。一室に閉ぢ籠つて自分丈けに大いに通用さするは余りに不可は無けれども室外一般に通用せんとするは難儀である、吾らが天下の廣きに叫號し吹聴せんとする主義理想は別にある。吾らは暇無きに非れども天上の事を説くを欲せずして卑しと雖地上の事を説く。吾らは彼の滔々たる低級精神家の説く天爵の何物たるを知らぬ。獨り人爵の尊きを知る。人爵とは勳功の謂ひである。勳功とは人類向上の事業であり大和魂と偉大なる才幹とを含有する。田中光顯が伯

爵たるは尊き人爵の侮辱である。維新前の大名の馬鹿若様が平然として子爵男爵たるは低級精神家が妄りに茫漠たる天爵を説くと全様奇観で、些も感謝すべき要は無い。吾が生れたるは勳功を立てんとてなり。精神の光現代に乏しければ我は精神に光を興へんと思ひ物質人を窮せしむれば我れは物質のほだしを切らんと望む

三

明治の年號の終り方に二個の大人物を見る。山縣公西園寺侯東郷伯等各種の人材あれども俗清二面の代表者として桂公乃木伯は各著く特色ある英雄である。前者は才幹を以て後者は人格を以て一は料理屋の大廣間に濃艶人目を眩する薔薇の花の如く一は清士の窓前に芳香包まんと欲して包む能はざる梅花の如く共に明治末代の壯觀であつた乃木伯の精忠誠心千古を貫きて消せざる所以を知るものは桂公の才幹縦横地を覆へし天を碎くの概あるを認めねばならぬ彼が清であり此が俗なるを以て直に一を善とし可とし一を惡とし不可とするは人間は聖賢の書を讀んでさへ居れば飯を食はずとも生き得ると云ふと全理で又滅亡に接近するとなる。蓋し人は靈に耽らば靈のために亡び肉に耽らば肉のために亡ぶ肉に亡ぶは陋なれども靈に亡ぶは決してより尊くは無い、全様に愚なることである。社會が皆釋迦の徒弟にして難行苦行を専門とし食物欲しからず女欲しからずの境涯に達するが理想なれば靈に耽るも亦可ならむも今日の日本で目前に迫れる苦痛は先づ金の心配である。財政難は念佛祈禱等の靈的の事で救ふことは出來ずして詩人宗教家を要せぬ商工農業で救はれる如何に教會に信者が増加し修養談を聞くものが多くとも日本は戦争をする力を得る能はず却つて俗事に勞し俗業に働き千圓の收入が二千圓となる割合で國民が金持ちになればわざわざ阿米利加あたりまで勞働者を送

りて白人より奴隷視さるゝ必要もなく新嘉坡に日本婦人の奇態の發展を見ずともよろしいわけである。社會は俗、國家は俗であつて俗が無ければ人は無く人が居れば必ず俗が伴ふ。田園の農夫山間の少女學校の教師など云へば如何にも俗ばなれのせる如くなれど田園の農夫は曉に明星の美に接せんために朝起きして山野に行きはしない山間の少女は決して天の女神と談らむために紅粉の美を凝らす事は無く學校の教師は月絡の上るのが楽しみで欠勤も大いに遠慮しつゝその高尚なる天職に従つて居ると云ふも必しも讒言では無い。中略。桂公の偉き所以は茲に在る。人は生れてより死ぬるまで物欲の炎に燒きつくさるゝものであつて、物欲を遂げんとするがだれもかれもの理想であるに能力拙きものは欲求徒らに強うして實際は出來兼ねる故假面を被りて物欲を罵り物質家をげなし靈魂云々を叫ぶ、然るに桂公は假面を脱ぎすて素面となり公々然と物欲を稱し右に行かんも左に行かんも才幹を唯一の劍とし正義を云はず道德を號ばず人の本能に突進する姿は千古稀なる勇者である。吾は公の才幹を稱して止まぬものである、何となれば人はもと物質家であるからである。然るに怨むべし吾らは物質家であり乍ら公の才と勇とに乏しい、才と勇とに乏しくして全じく欲望を遂げんとせば自ら才と勇とに代るべき何物かが入用である。多くの人はかゝる場合に大抵人格を借用する。滔々たる世の教育家の人格は概ねかゝる間に合せの人格である。人格が差し當り必要故一寸求めたものであつて何時投げすてゝも構はぬ人格である。此の故に吾人は當世君子を罵り度くなることが多い、所謂「人物」を信用するに躊躇することが多い、間に合せの人格よりも赤裸々の非人格の方が頼もしくて遙に入用である。この故に乃木大將の偉きが如く桂公も偉い。私は正直な者で御座いますと云ふ少善人よりも私は惡人で御座いますと云ふ惡人の方が遙に人間らしい、況んや桂公はさう惡人で無い。彼を大惡人の如くなして仕舞ふたのは

彼を嫉める人の仕業であつて彼を眞に悪人だと明言し得る資格のあるほどの善人は日本には少い。然るに彼を日本人物共進會場なる衆議院で咄々不徳と罵れる尾崎悋堂の面目は甚だ仰ぐに足るものがある。彼は無論聖人では無い其人格の清高にして非常な君子と稱する能はざるは明瞭の事であつて又屢賞嘆すべからざる行のありしより見れば敢て賢人でも無い。然れども彼には日本一の大才子桂公を拳を奮つて罵るに足る一の資格がある。それは氣品である彼の理想である。悋堂は進まんと欲すれば必ず進み云はんと欲すれば必ず云ふ。理想に動かされ進まんと欲して前後の得失利害を察せざる故に賢ならずと云へよう云はんと欲して情實に拘泥せざる故にその云ふ所或は空論でもあらう。然し彼の所謂不賢空論の類無くんば政治界の進歩は何に因つて得らるか、彼の胸中には理想の火が燃わて居る。理想の人なるが故に實際家で無いと云ふは愚である。彼の理想は斷じて地上の理想にして天上の理想では無い。理想なるが故に時として實際と扞格することもあらうがそれは實際が余りに陋なるものであるからである、彼の理想をして空想たらしむることがあればそれは日本の罪である、日本の文明が未だ眞の立憲政治に遠いためである。彼は純理の判斷を以て行はんとする。故或は實際に當らざる事の有らうともそれは日本の政治が情實の弊より脱しきらずに居るのが理由をなす。優等の政治家には必ず理想のあるを要す、桂公は大力量者なれども余りに才幹に富むため現實に執して理想の輝きが無く場當りを事とし彌縫を事とし遂に英才を藏し乍ら官僚政治家藩閥政治家非立憲政治家の標本として國民的なることを得ぬ。尾崎行雄は大才を藏せぬ彼はよく議會の壇上に立ちて大臣宰相を叱するの氣魄あらむもしかも國民の歡呼の聲の中に政友會を脱黨し主義を以て組織せる政友俱樂部の現狀は甚だ肅々たるものでは無いが、然り彼は大能力者で無い、無いが彼には能力以上のものがあり芳香紛々として彼の人格を

飾れるがためによく桂公を叱し原大臣を罵るの資格を有する。

乃木大將の精忠凜として日月を貫くが如くなるため吾らの大將に對する時恰も神に對する如くにて人間の親しみが無い大將は人間たるべく餘りに崇高であり大將を學ばんとしてもどこを學ぶべきか解らぬ。尾崎愕堂は飽くまで地上の人にて吾らの學ぶに丁度いい、彼には過があり不徳がある。彼は飽くまで人間であり吾らと全様の欠点あり失錯がある、明なること鏡の如く水の如きはその人格であり行藏であつて泥中の蓮花の趣は彼の前後を貫く光彩である。

普通人の當世に尊重すべき主要なる道徳は伶俐者たるに在る。怒を隠し怨を追ひ悲しい時に嬉しい如く喜まざるものに對して喜ぶ如く都合によりては劣等なるものを優等と云ひ汚いものを清いと云ひ飽くまで人の御都合を見計つて何事をも行ひ言ふ。處世術の上々として新道徳の主なるものである。有名なる伶俐者として司法大臣松田正久と云ふ人がある。風向きに従つて東西南北に靡き之も是なり彼も是なり其れも悪しからず此れも悪しからず何事をも先づ自ら云爲するを避け大勢のまにまに舵を取つて行き所謂人物駕御術の濫輿に達せるものである。彼も亦人傑であらう。巧みに人の感情を看破して之を左右するは凡物以上の才幹を有せるものであらうが斯くの如きは手段として策畧として可ならむもこの曖昧不離の態度を年中不斷にする者あらば斷じてこれ國士の面目でない。國士の體面は主義により理想に依つて保たれ策畧を弄し曖昧を尊ぶは非立憲國の秘密政治にだけ必要である。大正の立憲政治には目白の椿山莊は最早有害と云はれ桂公の相場師的頭腦は不向となつたとか。吾人は大正の政大いに揚らん事を祈るに先つて公明正大なる政治家を望む、獨り政治家のみでは無い全國民全青年が男子一片の意氣のために先づ物質の縛を切り捨て年久しく虐げられ來れ

る魂の芽生に培ひ水をそそぎ犬養木堂の意地を尊び尾崎學堂の高節に悟る所あらば甚だ大和民族の眞精神を發揮するに近き所あらむと思ふ。

草綠に、樹綠りに、綠色將に萬有を覆うて天地の氣力今恰も發せんとするに似たり。若葉の翠色に腫を凝せば其の彩その態幼なれども妙に優なれども高に清純潑瀾、中に無限の發展を含む、わが愕堂の面目も亦之に類するものに非ずや征戰三十年成功多しと云はず蹉跎少きに非れどもこの成らざるは主義のためにしてその敗れたるは理想のためなりとせば我れ豈に愕堂のために之を悲しむものならむや人非にして時未だ到らずとせば獨り志操を抱いて高峯に嘯か人も志士の本懷に背く所あらず權勢云ふに足らむや利祿云ふに足らむや人に尊ぶべきは皎々たる氣魄にあり。

日下江の入江の蓮花身の盛り人羨しきるかも

赤 猪 子

ふと思ふ雪崩聞きつゝ谷陸に獨り夜守るうら淋しさを

金 子 薫 園